スウェーデンでは高齢者も包摂したインクルーシブ社会についていかに学校で教えているのか

福祉の考え方は、幼少期から自然に根付く面と、教育で視点を深く広くしていく面があるのではないだろうか。ノーマライゼーションの理念が根付いているといわれている福祉国家、スウェーデンでは、どのような教育がされているのだろうか。北欧福祉国家の教育制度史や福祉国家論、社会福祉制度の研究に携わり、自身もスウェーデンに留学していた高知大学教授の是永かな子氏が、スウェーデンでの小・中学校での福祉教育、とくに高齢者観を育てる部分の内容を詳説する。

1. 本稿の目的

本稿では、日本の介護人材不足という課題を念頭に、福祉国家スウェーデンにおいて高齢者を含むインクルーシブ社会をどのように構築しようとしているのか、そのために学校で多様な人々が共に生活することをいかに教えているかに焦点を当てて、紹介したい。

2. 学校における高齢者観の育成

2．1　スウェーデンの義務教育制度

まずスウェーデンの義務教育制度について示す。スウェーデンの義務教育は日本の小学校と中学校に相当する9年一貫の「基礎学校」で保障される。日本の学習指導要領に相当するカリキュラムは1-3年、4-6年、7-9年の3段階で目標を設定しているため、3年、6年、9年終了までに、該当する内容を学習するという柔軟性をもつ。

さて、各基礎自治体や各学校は人事権も含めて一定の裁量が認められており、各学校がどの教科書を用いるかも決定できる。そのため、実際の教育現場での学びは様々であることが推察されるが、ここでは1-3年、4-6年、7-9年の各段階を対象とした社会科の教科書の具体例を一冊ずつ取り上げて、示すことにしたい。

執筆▶
是永かな子
高知大学 総合人間自然科学研究科 教授

2．2　基礎学校1-3年段階社会科

1-3年段階では、「PULS Samhällskunskap 1-3 Grundbok（以下、1-3年段階社会科）」[1]の教科書を見る。

1-3年段階社会科では**図1**のサムと**図2**のサラという子どもが登場する。サムは「お母さんのおなかのなかにいたときから右手が成長しなかった」と話し、義手をつけている。さりげなく障害のある男の子が主人公の一人として登場している。サラは「私の家族はスウェーデンと南アフリカからきた」、「父の家に住む週末以外はサムと同じアパートメントに住んでいる」と自己紹介する。このように外国につながる女の子であること、両親が別居しつつ、両方の家で生活していることを当たり前のように話すのである。ちなみにスウェーデンでは2020年時点で就学児童生徒の約24％が外国につながる子どもであり、その数が年々増えていることが指摘される。またスウェーデンは原則「共同親権」であり、離婚後も父親、母親両方と連絡を取り続けること、恒常的に親と子どもが会う機会を保障する「面会交流」、双方の家に交代で住む「交互居住」は一般的である。

さて、この1-3年段階社会科における高齢者に関する内容は「私たちの社会」の項目で示される。サムとサラが住むアパートメントには様々な人たちが住んでいることが説明されるからである。具体的には「アパートメントに住んでいる人は朝になると様々な場所にでかける」。「子どもは保育園か学校に出かけ、大人は職場に向かう。一部の大人は仕事を退職していて、彼らは『年金生活者』と言われる」、と。自分たちが住んでいるアパートメントに、年金生活者としての高齢者が住んでいること